

●ダンシングブレイド2
「京都の舞踏エネルギー」

志賀信夫 (批評家)



京都の小規模な舞踏フェス「Dancing Blade #2」に呼ばれて京都に行った。7月15日から3日間、公演を見て、その後トークをするというものだ。

京都は東京に次ぐ舞踏のメッカである。というのは、1980年に、大駱駝艦出身の大須賀勇が白虎社を結成して京都で活動し、出身の舞踏家たちの活動が現在も活発だからだ。白虎社は、「暗黒舞踏」に対して「明るい暗黒」を標榜し、日本のみならず東南アジアなどでも公演を行い、大規模でエンターテインメントな舞踏キャバレー的世界をつくりだした。

白虎社は1994年に解散したが、所属した桂勘、今貂子、由良部正美ら、さらに彼らに学んだ多くの舞踏家が活動し、コンテンポラリーダンスグループの花嵐など、舞踏の影響を強く受けたコンテンポラリーダンサーも多い。のみならず、白虎社に所属した佐東範一、水野立子らがJCDN（ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）をつくり、日本各地でダンス公演やワークショップなどを開催して、日本の新しいダンスシーンをつくりあげたが、そこに舞踏家たちも参加した。そして、今回の企画者で、筆者を招聘してくれたのも、白虎社出身の桂勘である。

関西では、他にも舞踏出身でコンテンポラリーダンスに関わった人として、現在、NPO法人ダンスボックスを主宰する大谷燠がいる。大谷は、白虎社同様、大駱駝艦出身のピシヨップ山田が結成した北方舞踏派に参加し、制作者としてトリイホールを経て、ダンスボックスを立ち上げ、大阪のコンテンポラリーダンスを牽引している。さらに大谷の舞踏のワークショップから、舞踏を背景にしたコンテンポラリーダンスグループ、千日前青空ダンス倶楽部も生まれ、きたまりなどを輩出している。

京都では、中心街にあるライブハウス、アバングルドで舞踏公演がたびたび行われ、今回の「Dancing Blade #2」もそこが会場だった。この公演は、福岡で活動する原田伸雄、屋久島から全国で公演する藤條虫丸と、今回の主催者の桂勘が3日間、それぞれトリをとめた。3人はともに70代、舞踏の第三世代といえる。

原田伸雄は、笠井叡に師事し、大野一雄に学んだ。1980年に舞踏青龍会を結成して、現在、福岡で約15人の門下生とともに活動し、今回の企画にも5人が出演している。藤條虫丸は大阪の劇団日本維新派出身で、屋久島で活動し、「The Physical Poets」を結成、今回は3人が出演している。桂勘は白虎社出身で、門下からは5人が出演している。そして、東京から、大森政秀が主宰する天狼星堂のワタルが出演した。

7月15日から17日の舞踏公演では、毎日7組の舞台があったので、それぞれについて短い評を示すことにする。

7月15日

1 タイニー/The Physical Poets

強いノイズの中、白くまだらに塗られた筋肉質の身体で、手にした金属の象徴する強度

と身体を対照し、内面の葛藤を表現した。そこには、ストリートダンスのスキルも巧みに生かされていた。

2 阿希/AKI

扇、歌、リコーダーなど多様なスキルを見せたため、和の雰囲気ともに、舞台を見る者に飽かせない。ただそこに、動きと身体そのものの変化が重なると、よりよいだろう。

3 舞踏土佐派/大村万朶・土居大記

絡み合う男女デュオにより、二人葛藤と物語性を強く感じさせる。ただ、観客がそのドラマツルギーに入り込めるかどうか少し気になるところだ。

4 天津孔雀（舞踏青龍會）

面をつけて登場し、性の垣根を越えることで、根源をさぐる視点と巧みな朗読。そこに、師である原田伸雄の女装の白い舞踏が見事に重なった。

5 百一（BAIYI）/舞踏白狐系

衣装の赤と黒の美しい対照とともに、バレエやモダンで磨かれたスキルと身体感覚がダイレクトに伝わり、中国の伝統に根ざした動きが、新たな踊りの可能性を感じさせた。

6 東北舞踏三角標/IGU

赤と白に二分された衣装で身体の内部を追求しつつ、赤、青、黒の水玉でまだらに彩られた顔が、自分の内部から彼方を見つめる意識を示していた。

7 藤條虫丸/The Physical Poets

ノイズなリフレインの中で身体を探りながら、痙攣とともに強い緊張を示しつつも、やがて、『時には母のない子のように』とともに、愛を求める姿が、心を惹きつけた。

7月16日

1 シンキミコ（舞踏青龍會）

白いドレスで、一つのポーズを徹底的に維持する力と、やがて万国旗を口から出してくるインパクト、それを顔に張り付けていくさまは、『ファイト』の楽曲とともに強く心に残る、いい舞台だった。

2 のせるみ（舞踏青龍會）

男性とも思える、黒シャツ黒ズボンで、ホリゾントの壁とともに踊りはじめ、流れるような丁寧な踊りからは、内面の変化も照明の影とともに浮かび上がって、秀逸だった。

3 望月紅華

水着的レオタードでノイズから津軽三味線の音に晒す身体は、ピアノ曲、ロシア民謡的な声と重なっていく。だが、舞台を際立たせるには、強い起承転結が必要だろう。

4 達磨流拳法研志館/西村進

少林寺拳法の一つ、達磨流拳法の演舞の丹田呼吸法は、組み手でその威力を垣間見せた。

5 五十嵐香里

臍脂のノースリーブと白い巻きスカートで百合の花とともに、カオスから静かに立ち上がり、天を求める姿が、後半の音楽のリフレインとともに残像をつくった。

6 杜昱枋/Dudu舞踏白狐系

黒いノースリーブのワンピースに長い黒髪が、顔を覆い続けることで生み出す世界を、イマジネイティブに広げ、逆巻くように髪を上げたときの狂気、さらなる乱舞とエロスの発露とともに、舞踏の強いエネルギーを吐き出した。

7 桂勘

白いスーツに白塗りの端正な姿が、さまざまにコラージュされた『戦場のメリークリスマス』とともに、踊りのポキャブラリーの多様さによって、カオスと聖なるものとの往還を、見事に見せた。

7月17日

1 松田美和子（舞踏青龍會）

黒い学生服に白いレースのチュチュ姿で、蝉の静寂から次第に狂気と女性性、身体を露わにしつつ、静かな美を獲得した。

2 滝worrier（舞踏青龍會）

夏のお嬢さんの麦藁帽にワンピース、花、数え歌から、優しい少女幻想を静かに紡ぎ続けた。さらなる強いカタストロフをぜひ見たいところだ。

3 金亀伊織/The Physical Poets

無音に裸身の存在が示す力から、その身体を通じて、自分の内面を執拗に探りつづける姿勢が、踊りに強い生命観を与えていた。

4 鳴海姫子/The Physical Poets

コロナ的マスクとともに、葛藤のなかから、身体と女性性を、流れる朗読の中に浮かび上がらせようとしていた。垣間見えた精神の闇をさらに広げてほしい。

5 ワタル/WATARU

大学の寮歌のようなものを歌いながら、客席から白シャツに黒ズボンで登場し、静かに世界を探るなかから、日常の姿で苦闘する狂気を体感させ、関東から唯一参加の気合いとともに観客を巻き込み、見事だった。

6 高砂舞踏協同組合/主宰：清子

明滅する光に白塗りの身体が浮かび上がり、やがてパーカッシヴな音とともに踊りが広がり、踊りが一貫している。真逆なものをぶつけるか、さらに強い狂気を示せると、よりいいはずだ。

7 原田伸雄（舞踏青龍會）

白塗り白シャツ、サスペンダーの白ズボンに、赤い花一輪のコントラスト、無音の中に拡張していく意識と、狂気から聖性を獲得する世界を巧みに表現し、最後に残像が焼きついた。

これらの公演後、毎日、筆者と桂勘、藤條虫丸、原田伸雄、清子らにの三名によるトークが行われた。また、そのなかで、筆者と同道した84歳の舞踏家、三浦一壮が数分間、踊った。トークの映像はいずれ編集・配信されて、見ることはできるはずだ。

翌18日、筆者らは奈良で活動する大野一雄の弟子、田中誠司のスタジオで、東京の舞踏家、大倉摩矢子の舞台を見たが、それについては、また記すことにする。

このように、西では、京都、大阪、奈良など関西、そして九州、四国など各地で舞踏家たちが活動している。筆者もこれまで、北海道と九州・福岡、京都で話す機会をいただいた。東京では、彼らの活動に触れる機会が少ないが、北海道や東北などの舞踏家の活動を含めて、各地の舞踏家とネットワークをつくって、互いに公演やワークショップ、情報交換を行う機会をつくれればと思っている。

海外からも常に注目されている舞踏の日本国中での動きに、今後も注目していきたい。

志賀信夫（しがのぶお）

批評家、編集者、大学等講師。舞踊批評家協会、舞踊学会会員。舞踊関係の講評・審査、トーク、公演企画など。著書『舞踏家は語る』（青弓社）、共著多数。『図書新聞』『週刊読書人』『ダンスワーク』『ExtrART』などに執筆。『コルプス』誌主宰。編集：吉増剛造『舞踏言語』、石井達朗『ダンスは冒険である』、谷川渥『芸術表層論』、富岡幸一郎『虚妄の「戦後」』他多数。

<https://butohart.jimdofree.com/>

